劉文淇『春秋左氏傳舊注疏證』稿本を読む

野間文史

【キーワード】劉文淇・春秋左氏傳舊注疏證・稿本・提綱稿

本誌の前身『広島大学文学部紀要』の第54巻（一九九四年）に「劉文淇の左傳學について」と題した論考を発表したことがある。原稿枚数制限のため、前後二回に分ける予定であった。

しかし、これは当時準備中でもあった《春秋正義を読み解く―劉文淇『左傳舊疏考正』を通して―》（東洋古典学研究会　一九九五年）の解題の前半であり、拙著が翌年八月に刊行されたため、つまりは後半を併せた解題を拙著に収録したため、第55巻にその後半を発表することは無かったのである。

拙著は清儒劉文淇の『左傳舊疏考正』の翻訳と注解がその中心であるが、これに冠した解題は、先ず劉文淇の生涯を概観し、次いで彼の左伝学の特徴とその学問形成に影響を与えた学者に言及し、さらに劉文淇のもうひとつの代表的な著述である『春秋左氏傳舊注疏證』（未完）について解説した後、『左傳舊疏考正』自体に解題を施し、劉文淇の略年譜を附したものである。

参考までに、旧拙稿の目次を以下に掲げよう。

一、劉文淇の生涯

乾嘉の学／父劉錫瑜／劉寶楠／金陵の約／阮元

二、劉文淇の学問と著述

洪梧／包世臣／凌曙

（一）春秋左氏傳舊注疏證

長編／沈欽韓宛書簡／中国科学院歴史研究所（以上本号掲載）

付録一　劉文淇家系図

（二）左傳舊疏考正（以下次号掲載予定）

劉寶楠／沈欽韓／黄承吉

（三）その他の著書

（四）劉毓崧と劉壽曾

三　左傳舊疏考正解題

自序／体裁／底本／包愼言／後世の評価／版本／附記（小沢文四郎『儀徴劉孟瞻年譜』）

付録二　劉文淇略年譜

さて、拙著《春秋正義を読み解く》を発表後すでに八年が経過している。この間に劉文淇に関する研究が若干数発表されており、また予想をもしなかったことではあるが、『春秋左氏傳舊注疏證』の原稿そのものの影印本（「續修四庫全書」所収）が公刊された。これは筆者にとってはひとつの事件である。

そしてこれらの諸業績を検討した結果、拙著の解題にいささかの訂正と補遺を施す必要が生ずることとなった。本稿を草した所以である。

○

ところでこの十年間の経学研究分野に関して言えば、特に台湾中央研究院中国文哲研究所の林慶彰氏を中心に、経学に関する国際研究大会が次々と計画実行され、同時にその成果が著作として数多く公刊されているのが注目されるところである。これを清朝経学に限ってみても、

・『清代經學國際研討會論文集』江日新編輯　文哲研究所　1994
・『乾嘉學術研究論著目録1990-1993』林慶彰主編　文哲研究所1995
・『乾嘉學者的治經方法』蔣秋華主編　文哲研究所　2000
・『清代揚州學術研究』祁龍威・林慶彰主編　学生書局　2001
・『乾嘉學者的義理學』林慶彰・張壽安主編　文哲研究所　2003

等の諸著作が挙げられる。

ただ劉文淇に関する研究は、いまだ盛況とは言い難い。筆者が目睹し得たものとしては、張舜徽氏（1911-1992）の『清儒學記』（齊魯書社 1991）中の「揚州學記」に「劉文淇（附劉毓崧・劉壽曾・劉師培）」の項目がたてられ（後に、『張舜徽學術論著選』華中師範大学出版社 1997）、また林慶彰氏『清代經學研究論集』（文哲研究所 2002）中に、「劉文淇《左傳舊疏考正》研究」の一節が用意され、また我が国の喬秀岩（橋本秀美）氏『義疏學衰亡史論』（東京大学東洋文化研究所 2001）の第二章「二 劉學術の風貌　一　劉文淇の劉炫説についての分析」に充てられているもの等が有る。ちなみに、「評劉文淇《左傳舊疏考正》」（中国文哲研究通訊十巻一期 2000）の著者陳秀林とは橋本秀美氏とのこと。

なお中国文哲研究所では林慶彰・蔣秋華両氏によって一九九八年に「清代乾嘉揚州学派研究計画」が立ち上げられ、その計画中の一部として、揚州学者の著作の点校本が出版されているのは有り難い。

・『汪中集』王清信・葉純芳點校　中国文哲研究所　2000
・『劉壽曾集』楊晉龍校訂・林子雄點校　中国文哲研究所　2001

がすでに出版されており、次いで劉毓崧『通義堂文集』・『汪喜孫全集』が進行中だということである。

二

○

さて拙著《春秋正義を読み解く》の解題中、先ず劉文淇の孫、すなわち劉毓崧の長男にあたる劉壽曾に関する記述の誤りを訂正したい。拙文は以下のとおりである。

劉壽曾、字は恭甫。道光十八年(1838)生まれ。時に祖父劉文淇は五十歳、父劉毓崧は二十歳であった。祖父の大業を完成させるべく孜孜として怠ることなく務めたが、襄公四年までを完成させたところで、光緒八年(1882)、四十五歳の若さで病没した。その著作としては『昏禮重別論對駁義』二巻が「皇清經解續編」に残るのみで、その他の『南史校議集』・『平博雅堂集』・『柴雲雜記』等は伝わっていない。(41頁)

ここには誤りが二点有る。第一点目、右のうち「『南史校議集』・『平博雅堂集』」は誤りで、

『南史校議集平』・『傳雅堂集』

に訂正すべきである。初歩的ミスと言わねばならない。

第二点目、(右のように修正しても)「『傳雅堂集』・『柴雲雜記』等は伝わっていない」は誤りで、『傳雅堂集』はかつて出版されたことがあるということ。

このたび公刊された前掲の楊晉龍氏校訂・林子雄氏点校『劉壽曾集』によれば、劉壽曾の著作としては、

・『傳雅堂文集四巻詩集一巻』民国二十六年(1937)排印本
・『昏禮重別論對駁義』皇清經解續編本(1888)
・『臨川答問』積學齋叢書本(清光緒間南陵徐乃昌刊)

の三書がこれまでに刊行されていること、ただし『南史校議集平』・『柴雲雜記』・『續左箚記』・『春秋五十凡例表』等は未だ刊本を見ないということである。

ちなみに右の『劉壽曾集』とは『傳雅堂文集四巻詩集一巻』を改題した標点本で、新たに林子雄氏によって「附録一　劉壽曾親友交往録」、「附録二　劉壽曾年譜簡表」が収録されている。

○

劉文淇から劉毓崧を経て劉壽曾の代に至ってもなお未完に終わった『春秋左氏傳舊注疏證』に関し、拙著《春秋正義を読み解く》の解題中で以下のように記述した。

以後、「長編」と未完の「原稿」は代々劉家に伝えられていたものと思われるが、辛亥革命を経て中華民国の成立、そし

て日中戦争を経て中華人民共和国の成立を見る間に、「長編」の存亡はとうとう不明となってしまった。ところが幸いにも、原稿（隱公元年より襄公五年まで）の方は上海歴史文献図書館に所蔵されていたのである。それが中国科学院の歴史研究所第一、二所資料室の手によって整理工作がなされ、句読を切ったB5判の活字本の本文一千頁を越える巨冊として科学出版社から公刊されたのは、一九五九年のことであった。かの「金陵の約」より実に百三十年後ということになる。この書物の出版によって我々は始めて劉氏三代の左氏学の実体を、その半ばまでは伺い知ることができることとなったのである。書中、断案を下す表現として「文淇案」とあるのは申すまでもないが、また「壽曾案」とか「貴曾案」という表現もあって、この書物がまさしく劉氏三代の努力の結晶であることを示しているのである。（27頁）

なんとこの原稿が、このたび公刊された「續修四庫全書」経部中の第126冊・第127冊に収録され、影印本ながら、その実物に近いものを見ること可能となったのである。本稿を草した第一の目的は、この『春秋左氏傳舊注疏證』稿本を瞥見しての読後感と、筆者が新たに得た知見を述べることにある。

かつて拙著解題を作成するに際しては、「中国科学院歴史研究所第一、二所資料室」による「整理後記」を大いに参照したのであるが、原稿そのものを見ることを全く予想していなかったため、「資料室」が原稿にいかなる処理の手を加えたかについては言及していない。いまその原稿を目の当たりにした結果、「資料室」の作業が極めて周到であることを改めて認識した次第である。以下その実態について検討してみよう。

四

ところで本稿ではここまで「原稿」と称してきたのであるが、「整理後記」によると、実際には清書原稿とその一歩手前（或いは二歩）の原稿の二種類が有り、また、これは拙著解題でも言及した構想メモとでも呼ぶべき「提綱稿」が併せて伝えられてきたという。

原稿		清書稿		排印本
第一本	隱公5～11	第一本	隱公1～11	○
第二本	桓公1～18	第二本	桓公1～18	○
		第三本	莊公1～32	○
		第三本	閔公1～2	○
		第四本	僖公1～16經	○
第三本	僖公1～22		16～22據原稿抄補	
		第五本	僖公23～33	○
第四本	文公1～18	第六本	文公1～18	○
第五本	宣公1～18	第七本	宣公1～18	○
第六本	成公1～18		1～18據原稿抄補	
第七本	襄公1～5		1～5據原稿抄補	

その清書原稿すなわち「清書稿」と「原稿」、そして排印本との関係を、「整理後記」をもとに整理し直してみると右のようになる。そしてこのたび「續修四庫全書」が影印したのは、「清書稿」の部分である。

つまり排印本では襄公五年まで具わっている本文が、稿本では宣公十八年止まりだということである。ただし「續修四庫全書」にはそのことについて何らの説明も無いため、

一二六・經部・春秋類
春秋左氏傳舊注疏鈔不分卷（隱公元年至僖公二十二年）
〔清〕劉文淇　劉毓崧　劉壽曾撰……一
一二七・經部・春秋類
春秋左氏傳舊注疏鈔不分卷（僖公二十三年至宣公十八年）
〔清〕劉文淇　劉毓崧　劉壽曾撰……一

と封面に表記されているけれども、実際には僖公十六年伝から二十二年までの本文が缺落していることが、当該箇所に至らなければ分からない。

ただその代わりに収録されているのが、後述するように「提綱稿」である。これが排印本との大きな相違点である。その具体的な分巻次第と頁数については、「附録一　排印本稿本対照表」を参考されたい。

○

「整理後記」によると、その整理作業の基本方針は以下の通り。

一　原則的には原稿本来の面目を極力保存する。明らかな錯誤が有っても、安易には訂正せず、確実な証拠が有ってはじめて訂正する。疑問が残る場合は、傍注に指摘するに止める。

二　原稿中の多くの空白（劉氏が後で埋めようとしたもの）は極力原典に当たって補う。

三　劉氏の引用典籍のうち、原典と合わず、誤写と思われる部分は、良書を根拠として訂正する。場合によっては傍注に大意を述べるのみで、訂正はしない。

四　原稿が引用する典籍のうち、篇名・書名・年月の錯誤はすべて訂正するか、傍注に指摘する。

五　原稿と清書稿との齟齬については、その状況に応じて処理する。おおむね後出の清書稿に従うが、清書稿の誤写や脱落部分は原稿によって補正する。

六　原稿と清書稿とにはしばしば眉批（頭注）の補記が見えるが、これは劉氏の見解なので、「原稿眉批」として傍注に記載し、「整理注」と区別する。

七　先ず〔經〕または〔傳〕文を、次いで〔注〕文と〔疏證〕の順であげる。

八　断句には「、」と「。」を用いる。

このたびの稿本の公刊によって、上記の基本方針がどのように実行されているのか、我々はその具体相を知ることが可能となったわけである。以下に二・三の問題点について申し述べたい。

○

上記の基本方針の一・二・三・四は、いずれも劉氏の稿本の不備の補正ということで共通するであろう。我々がこの稿本と排印本とを見比べるとき、排印本の読み易さは歴然としている。

すなわち稿本中に見える数多くの空白部分があるいは補充され、あるいは傍注に注記され、稿本では隱公元年から四年に至るまでの部分を除いてすべて句読は無いが、排印本では全文に句読が施されている。「第一、二所資料室」による整理工作の恩恵は極めて大きいものといわねばならない。

ただその補正に完璧を期しがたいのは、けだしやむを得ないであろうか。一例だけ挙げてみよう。以下、後の説明のため、排印本には無い傍線・波線・かぎ括弧・「＊」印を施している。

1 僖公八年經（稿本126冊640頁・排印本285頁）

秋。七月。禘于大廟。用致夫人。

〔疏證〕杜注。禘、三年大祭之名。與左氏舊説三年一禘合。

又云。大廟、周公廟。禘禮説詳莊二十□㊀年疏證。曾子問。祭。過時不祭。禮也。疏㊁「過時不祭。謂四時常祭也。熊氏云。若喪祭及禘祫祭。雖過時猶追而祭之。故禘祫志云。昭十一年。齊歸薨。十三年。會于平邱。冬公如晉。不得祫。至十四年乃追而祫之。十五年乃禘也。又僖公八年。春當禘。以正月會王入于洮。故七月而禘。故雜記云。三年之喪既穎。＊其練、祥皆行。是追行前練、祥祭也」。熊氏以此禘于大廟。當禘而會洮。故禘在七月。蓋本鄭康成説。知者。襍記七月而禘。獻子爲之也。疏。僖八年。于時未有獻子。而七月禘者。鄭答趙商云。以僖八年正月公會王人于洮。六月應禘。以在會未還。故至七月乃禘。君子原情免＊之。理不合譏。而書之者。爲致夫人。故書七月禘也。此鄭君説。此經禘在七月之説。熊氏以爲禘當在春。鄭君以爲六月應禘者。鄭用明堂位。季夏六月以禘禮祀周公于大廟也。郊特牲云。春禘而秋嘗。祭義。君子合諸天道。春禘秋嘗。故焦氏以爲春當禘。鄭注郊特牲云。禘當爲禴字之誤也。則鄭君不從春禘之説。故言禘當在六月也。杜又云。致者。致新死之主於廟。而列之昭穆。夫人＊淫而與殺。不薨於寢。於禮不應致。故僖公疑其禮。歴三禘。今果行之。嫌異常。故書之。疏云。僖公不爲哀姜作喪畢禘祭。其禘自從閔公數之。二年除閔喪爲禘。至五年復禘。今八年復禘。姜死以來。已歴三禘。今因禘祭。果復行之。杜氏歴三禘之説。亦以三年一禘計之也。鄭玉云。

夫人無姓氏。遂至紛紜。（以下省略）

傍注㊀　原稿闕文。査當作「閔二年」。

㊁　「疏」以下一百三十二字不見於「曾子問」。

先ず傍注㊀について。稿本のままでは、禘禮の説を「莊二十□年疏證」の箇所で詳細に論じたことを述べていることになるのであるが、実際には閔公二年「夏五月乙酉吉禘于莊公」の条の疏證を指しており、ここでは傍注が稿本自体の誤りを訂正していることになる。これは基本方針の第一点目に相当する。

次に傍注㊁について。ここでは「疏」以下の一百三十二字が「曾子問」疏文中に見えないことを指摘している。そして「一百三十二字」とは「祥祭也」までを指す。ところが実際に「曾子問」疏に当たってみると、疏文は「過時不祭。…是追行前練、祥祭也」までがそのまま存在し、「熊氏」以下は疏文を踏まえた劉氏の文章であることが分かる。したがって傍注二は調査不足だと言わざるを得ない。

次に「＊」を施した「潁」「免」「人」字は、稿本では一字空白になっている。これが排印本では補充されているわけで、これは基本方針の第二点目に相当する。実は稿本中にはこのような空白が多数見られるが、これらが排印本では周到に埋められているのである。

最後に波線部分について。この「于時未有獻子。而七月禘者。鄭答趙商云。以僖八年」の十七字、実は稿本中には見えないものである（ただし空白だというわけではない）。したがってこれは基本方針の第五点目、「清書稿」の脱落部分を「原稿」によって補正したものであることが予想される。

右はわずかに一例であるが、「資料室」における整理作業の一端を窺うことができるであろう。

○

ただ筆者がこのたび稿本を瞥見して一番興味を引かれたのは、「提綱稿」である。

すでに述べたように、また本稿「附録一　排印本稿本対照表」を見れば了解されるように、稿本では僖公十六年傳から僖公二十二年傳までを缺いている。排印本では、この部分を「原稿」をもとに補完したわけであり（330頁～356頁　據原稿抄補）、後の成公・襄公の部分（760頁～1025頁）も同様である。

ただこの稿本ではその缺けた部分の代わりとして、僖公元年から二十二年までの「提綱稿」が収録されているのである。その具体的な内訳については「附録二　提綱稿目次」を参照されたいが、これが筆者にとって予想外の収穫となった。

ところで、実は「提綱稿」については「整理後記」でもすでに言及しており、拙著解題中でも以下のように記述した。

ちなみに現行本『舊注疏證』には、その「原稿」と「清抄稿」、そして「提綱稿」の写真がそれぞれ二葉ずつ付録されているが、このうちの「提綱稿」が筆者には興味深い。これはいわば劉文淇の「構想メモ」であって、ここには経伝の文章の引用に続けて「舊注」の有無（つまり「服」・「賈服」の表記のみで、注の文章の引用は無い）を記し、ついで「疏證」に引用するはずの文献、あるいは先学の名前のみが、たとえば

○　晉世家　杜（預）　江（永）　沈（欽韓）　洪（亮吉）

○　年表　楚世家　周本紀　江永

○　杜注　沈欽韓云　二兄云　齊世家

というような形で記録されている。そしてこれらの本文がすでに「長編」中に収録されていたことは言うまでもなかろう。「長編」に収集された資料の中から何を選び出し、これを如何に関連づけ、どのような判定を下すか。これこそ「長編」作成以上に、時間と体力と精神力を要する作業であった。（28頁）

排印本で紹介された「提綱稿」の第一葉は僖公十七年伝・十八年経・伝の部分（稿本では126冊816頁）と、もう一葉は宣公三年伝の部分である。後者はこのたびの稿本には収録されてはおらず、はたして現在「提綱稿」がこの他にどの程度残されているのか、残念ながら「整理後記」からも不明である。

八

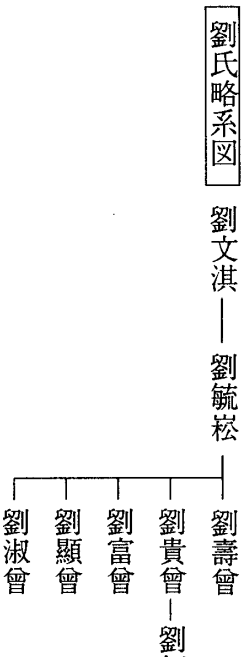
さて右の解題では、この「提綱稿」を「劉文淇の構想メモ」だと表現したのであるが、これには修正が必要となった。なぜならすでに解題で挙げた例の中にも見えるのであるが、「二兄云」とは劉貴曾を指しており、これが排印本（稿本でも）では「貴曾云」と表記されているからである。劉文淇が自らの孫を「二兄」と称するはずはない。解題作成当時、このことに筆者の注意が向かなかったのはまことに遺憾である。しかも実はよく読めなかったものとして、この一葉には「先祖案」という記載も有った。これこそ実は劉文淇その人であったのだ。

このたびの「提綱稿」によって筆者自身が明らかに確認できたことは以下の通り。

先大夫案・先祖案……劉文淇

先兄・大兄……劉壽曾

二兄……劉貴曾



ただしこの点についても、すでに「整理後記」が言及していることであって、「整理後記」は「二兄」という称呼は壽曾・貴曾の弟である富曾または顯曾にしてはじめて可能なものであるが、これをいかに解すべきであろうか、と結んでいる。

筆者案ずるに、「提綱稿」もまた何度も書き替えられたのではあるまいか。その元はやはり劉文淇まで遡ると考えるべきである。いま残るのはその最終段階稿であろう。

「長編」→「提綱稿」→「原稿」→「清抄稿」

という流れの中で、「長編」とても劉文淇以降に追加されたことが予想されるし、その後のものについても、数稿が存在したであろう。いずれにしても、これらの点を含めて、この「稿本」と「提綱稿」とは、当時の書物の形成過程を伺うことのできる好個の資料と言える。

○

さて「提綱稿」で今ひとつ注目すべきは、列挙された書名・人名の右肩に「○」印と「△」印が付けられていることである。「○」印は劉氏が妥当だと判断したもの、「△」印は否定される説だということ。一例を挙げよう。先ずは排印本、次いでその「提綱稿」である。**I**例と同様、排印本には無い符号を施しているが、傍線部が実は「提綱稿」に記載された書名・人名である（**I**例も同じ）。

II 僖公四年傳（稿本126冊562頁・排印本254頁）

〔傳〕四年。春。齊侯以諸侯之師侵蔡。蔡潰。遂伐楚。楚子使與師言曰。君處北海。寡人處南海。唯是風馬、牛不相及也。

〔注〕賈、服云。風、放也。牝、牡相誘謂之風。費誓疏　本疏

〔疏證〕杜注。楚界猶未至南海。因齊處北海。遂稱所近。閻若璩四書釋地云。禹貢。海岱惟青州。故蘇秦説齊宣王。北有渤海。司馬遷言。吾適齊。北被于海。降至漢景帝。猶置北海郡於營陵。營陵、舊營邱地。左傳云。君處北海。是也。又潛丘箚記云。楚在春秋。地雖廣。不濱於海。楚子曰。寡人處南海。南海、今廣州府治。爲當日百越地。雖未屬楚。要爲楚兵力之所及。鄭伯謂莊王其俘諸江南。以實海濱。亦見楚號令及於南海。梁履繩云。楚語韋注云。南海羣蠻也。文十六年傳。庸人帥羣蠻以叛楚。則其前之服屬可知。閻説與韋正合。壽曾曰。荀子王制篇。北海則有走馬、吠犬焉。然而中國得而畜使之。南海則有羽、翮、齒、革、曾青、丹干焉。然而中國得而財之。注。海謂荒晦絶遠之地。不必至海水也。北海、南海。不必以實地證之。賈、服訓風爲放。書疏、本疏文同。今合引之。御覽八百九十八引注風、放。亦賈、服義也。焦循云。費誓。馬牛其風。鄭注。訓風爲走逸。釋名。風、放也。氣放散也。詩北山。出入風議。箋亦云。

風、猶放也。是風爲放逸之名。馬牛各有羈縶。不越疆界。惟放縱走逸。則可越界而行。上云君處北海。寡人處南海。並不連疆接境。雖放馬牛。使之走逸。斷不相及。言楚之馬牛雖逸。不能入齊地。齊之馬牛雖逸。不能入楚地。言其遠也。故下云不虞君之涉吾地也。何故。至因牝、牡相誘而逸。此風之由耳。呂氏春秋。乃合壘牛、騰馬。游牝於牧。高誘注云。皆將羣游。從牝於牧之野。風合之。風合亦當謂放之使合。杜以馬、牛風逸。爲末界微事。未得傳意。二十八年。晉中軍風于澤。亦是馬走逸於澤。杜言因風而走。亦未是。壽曾曰。焦駁杜說是也。*具謂牛、馬相誘。由風。則與賈、服義不合。惠棟亦引呂氏春秋解之云。其說與賈侍中蓋同。漢儒相傳有是說也。尚書云。馬、牛其風。按惠說是也。北魏書崔敬邕傳。除管州刺史。庫英奚國有馬百匹。因風入境。敬邕悉令送還。於是夷人感謝。因風入境。猶言因放入境。正用賈、服說。廣雅釋言亦云。風、放也。朱駿聲云。風讀爲放。聲之轉也。杜注。馬、牛風逸。釋爲因風而走。其誤與焦同。蓋與晉中軍風於澤同說。黃生義府云。左傳楚子云。唯是風馬、牛不相及也。言唯兩國比鄰。或有馬、牛逸越竟。相責之事。今地勢遼遠。不虞何以見伐。見小釁亦無。何況大釁。

【提綱稿】（稿本126冊753頁）

傳四年春齊侯以諸侯之師侵蔡蔡潰遂伐楚楚子使與師言曰君處北海寡人處南海唯是風馬牛不相及也囧賈服云　費誓疏　本疏

疏證　杜注　閻若璩四書釋地　又潛丘劄記云　梁履繩云　先兄曰　□□　焦循云　壽曾曰　惠棟云　北魏書崔敬邕傳　廣雅釋言云　朱駿聲云　黃生義府

原稿（排印本）が「提綱稿」に挙げられた書名・人名をそのままの順序に従い、本文を伴って文章化していることが了解できるであろう。「○」印が附された説に対して、後に「焦駁杜説是也」、「按惠説是也」（波線部）として断案を下していることも分かる。

ちなみに拙著解題で劉氏の著書の欠点として、次のように指摘したことがあるが、

> また最大の長所が、逆に欠点ともなり得るという皮肉な一面もある。それは劉文淇の考証があまりに詳細であるため、その全文を読まなければ結論が容易に分からない場合も少なくないということである。（29頁）

この「提綱稿」を見ると、劉氏の判定が直ちに見える仕掛けになっている。もっとも成書の段階で見えなくなるのは、やはりやむを得ないであろうか。

なお、「*」印を附した例について。

・「地云」は、稿本には無く、排印本が補正したもの。

・「具」字は「其」字の誤り。これは「稿本」を見なければ、なかなか分かりにくい誤植であろう。

もうひとつ、「△」印を付された例を挙げる。

Ⅲ僖公元年經（稿本126冊537頁・排印本243頁）

齊師、宋師、曹師城邢。

〔疏證〕杜注。一事而再列三國。於文不可言諸侯師。*故沈欽韓云。並列三國。各著其勞也。春秋録纖芥之善。諸侯能帥師以救鄰國之患。以師爲重。故不書爵。傳云諸侯。而杜決其爲大夫。舛矣。

【提綱稿】（稿本126冊764頁）

齊師宋師曹師城邢

疏證　杜注△　沈氏○

右の例では、「△」印を付された杜注が「舛矣」（波線部）として退けられていることが分かる。ただし引用された杜注そのものではない。なお沈欽韓の文章は「故不書爵」まで。

また「*」印は句読の誤り。杜注の文章は実際には「故」字までである。

○

以上、「提綱稿」を瞥見して明らかになったことを略述した。細かなことを言えば、「提綱稿」には有るのに「稿本」にはその記述が無いもの、逆に「稿本」には有るのに「提綱稿」に該当する人名・書名が無いもの、また「提綱稿」に挙げた順序が「稿本」では入れ替わっているもの、「提綱稿」の誤記が「稿本」で改められているもの等、さまざまな例が目に付くが、本稿に取りあげるまでもないであろう。

最後に付言すべきこととして、「續修四庫全書」本の影印のミスを指摘しておきたい。先ず一点目は、落丁。ただしページ数は飛んでいないのだから、落丁という表現は正しくないかもしれない。それはともかく、

稿本686頁と687頁の間に一葉（排印本304頁～305頁）、
稿本691頁と692頁の間に一葉（排印本308頁～309頁）、

の缺落が有る。影印の際の遺漏である。

なお稿本126冊324頁は莊公七年の経文「夏、四月、辛卯…」と「注」並びに「疏證」までこの頁の半ばを占めるが、以下が空白となっている。しかし排印本ではこの後に経文の二条、続けて伝文の三条が記載されている。これは稿本に無い文章を、排印

本が補ったものであろう。

第二点目は乱丁。ただしこれまたページ数に狂いは無いから、正確には乱丁とはいえない。影印の際に順序を間違えたのであろう。このことからすると劉氏の原稿にはもともと頁数の記載が無かったと思われる。問題の箇所、稿本の640頁から647頁は、

640→643→644→645→646→641→642→647

の順が正しい。

以上の二点は、まことに惜しまれる過失である。

○

近時「續修四庫全書」が公刊され、これまで秘蔵されていた多くの貴重書や稀覯本が公開されたのは、まことに慶賀すべきことである。かねてより劉文淇の左伝学に関心を持っていた筆者にとって、『春秋左氏傳舊注疏證』稿本の公刊は予想もしないことであった。このたびこの稿本を瞥見し、新たな知見を得、また旧稿を補正できたのは幸いであった。

ところで中華書局の標点本シリーズとして「十三經清人注疏」が有るのは周知のことであろう。この中に劉文淇『左傳舊注疏證』が入っているのが注目されるところである。ただし『春秋』類に関しては、

・洪亮吉『春秋左傳詁』（李解民點校　1987）

・鍾文烝『春秋穀梁傳補注』（駢宇騫・郝淑慧點校　1996）

はすでに刊行されているものの、陳立『公羊義疏』・廖平『穀梁古義疏』、そしてこの『左傳舊注疏證』は未刊である。

なお仄聞するところでは、現在、中国社会科学院でも、かつての排印本が断句のみであることを不満とし、また少なからざる錯誤を訂正し、新たに標点を施して出版する企画が進行しているとのことである。ちなみにかつての中国科学院歴史研究所「資料室」の整理工作は、楊向奎氏が責任者であったという。新たな標点本の実現を鶴首して待つものである。

○

予想標点本　例…僖公四年伝

〔傳〕四年、春、齊侯以諸侯之師侵蔡、蔡潰、遂伐楚。楚子使與師言曰、「君處北海、寡人處南海、唯是風馬、牛不相及也」。

〔注〕賈・服云「風、放也。牝牡相誘謂之風」。費誓疏　本疏

〔疏證〕

杜注「楚界猶未至南海、因齊處北海、遂稱所近」。

閻若璩四書釋地云「禹貢『海岱惟青州』、故蘇秦説齊宣王『北有渤海』、司馬遷言『吾適齊、北被于海』、降至漢景帝、猶

置北海郡於營陵。營陵舊營邱地。左傳云『君處北海』、是也」。

又潛丘箚記云「楚在春秋、地雖廣、不濱於海。楚子曰『寡人處南海』。南海今廣州府治。爲當日百越地、雖未屬楚、要爲楚兵力之所及。鄭伯謂莊王『其俘諸江南、以實海濱』、亦見楚號令及於南海」。

梁履繩云「楚語韋注云『南海羣蠻也』、文十六年傳『庸人帥羣蠻以叛楚』、則其前之服屬可知。閻説與韋正合」。

壽曾曰「荀子王制篇『北海則有走馬・吠犬焉、然而中國得而畜使之。南海則有羽・翮・齒・革・曾青・丹干焉、然而中國得而財之』、注『海謂荒晦絶遠之地、不必至海水也』。北海・南海、不必以實地證之。賈・服訓風爲放、書疏・本疏文同、今合引之。御覽八百九十八引注『風、放』、亦賈・服義也」。

焦循云「費誓『馬牛其風』、鄭注訓風爲走逸。釋名『風、放也。氣放散也』。詩北山『出入風議』、箋亦云『風、猶放也』。是風爲放逸之名、馬牛各有羈繫、不越疆界、惟放縱走逸、則可越界而行。上云『君處北海、寡人處南海』、並不連疆接境、雖放馬牛、使之走逸、斷不相及。言楚之馬牛雖逸、不能入齊地、齊之馬牛雖逸、不能入楚地、言其遠也。故下云『不虞君之涉吾地也、何故』。至因牝牡相誘而逸、此風之由耳。呂氏春秋『乃合畺牛、騰馬、游牝於牧』、高誘注云『皆將羣游、從牝於牧之野、風合之』。風合亦當謂放之使合、杜以馬牛風逸、爲末界微事、未得傳意。二十八年『晉中軍風于澤』、亦是馬走逸於澤。杜言因風而走、亦未是」。

壽曾曰「焦駁杜説是也、其謂牛馬相誘、由風、則與賈・服義不合」。

惠棟亦引呂氏春秋解之云「其説與賈侍中蓋同。漢儒相傳有是説也。尚書云『馬牛其風』」。按惠説是也。

北魏書崔敬邕傳「除管州刺史、庫英奚國有馬百匹、因風入境。敬邕悉令送還、於是夷人感謝」。「因風入境」、猶言因放入境、正用賈・服説。廣雅釋言亦云「風、放也」。

朱駿聲云「風讀爲放、聲之轉也、杜注、馬牛風逸、釋爲因風而走、其誤與焦同。蓋與『晉中軍風於澤』同説」。

黄生義府云「左傳楚子云『唯是風馬牛、不相及也』、言唯兩國比鄰、或有馬、牛逸越竟、相責之事。今地勢遼遠、不虞何以見伐。見小釁亦無、何況大釁」。

附録一　排印本稿本対照表

	排印本	稿本		排印本	稿本		排印本	稿本
隱前伝	001	126-001	桓10経	109	126-249	莊12伝	162	126-361
隱01経	003	126-005	桓10伝	110	126-249	莊13経	164	126-365
隱01伝	005	126-010	桓11経	111	126-252	莊13伝	164	126-365
隱02経	015	126-032	桓11伝	112	126-253	莊14経	165	126-367
隱02伝	016	126-035	桓12経	115	126-260	莊14伝	165	126-367
隱03経	017	126-036	桓12伝	116	126-261	莊15経	169	126-376
隱03伝	018	126-039	桓13経	117	126-264	莊15伝	169	126-376
隱04経	023	126-050	桓13伝	118	126-265	莊16経	169	126-378
隱04伝	025	126-053	桓14経	120	126-270	莊16伝	170	126-379
隱05経	027	126-061	桓14伝	121	126-271	莊17経	172	126-383
隱05伝	029	126-064	桓15経	122	126-273	莊17伝	172	126-383
隱06経	037	126-083	桓15伝	123	126-275	莊18経	173	126-385
隱06伝	038	126-084	桓16経	124	126-278	莊18伝	173	126-386
隱07経	040	126-091	桓16伝	125	126-279	莊19経	176	126-392
隱07伝	041	126-093	桓17経	127	126-283	莊19伝	176	126-392
隱08経	044	126-099	桓17伝	128	126-285	莊20経	179	126-399
隱08伝	045	126-100	桓18経	130	126-289	莊20伝	179	126-399
隱09経	049	126-115	桓18伝	130	126-289	莊21経	181	126-402
隱09伝	050	126-116	莊01経	134	126-296	莊21伝	181	126-402
隱10経	052	126-121	莊01伝	135	126-300	莊22経	183	126-407
隱10伝	053	126-121	莊02経	136	126-304	莊22伝	184	126-408
隱11経	054	126-124	莊02伝	137	126-305	莊23経	190	126-422
隱11伝	054	126-124	莊03経	137	126-306	莊23伝	191	126-423
桓01経	064	126-144	莊03伝	138	126-308	莊24経	192	126-427
桓01伝	064	126-145	莊04経	139	126-310	莊24伝	194	126-431
桓02経	065	126-148	莊04伝	140	126-311	莊25経	196	126-435
桓02伝	067	126-151	莊05経	142	126-316	莊25伝	196	126-437
桓03経	080	126-181	莊05伝	142	126-316	莊26経	198	126-441
桓03伝	082	126-187	莊06経	142	126-318	莊26伝	199	126-442
桓04経	084	126-191	莊06伝	143	126-319	莊27経	199	126-444
桓04伝	084	126-191	莊07経	145	126-324	莊27伝	200	126-445
桓05経	084	126-193	莊07伝	145	126-缺	莊28経	201	126-449
桓05伝	086	126-196	莊08経	145	126-325	莊28伝	202	126-451
桓06経	092	126-211	莊08伝	146	126-327	莊29経	207	126-462
桓06伝	093	126-213	莊09経	150	126-336	莊29伝	208	126-463
桓07経	102	126-233	莊09伝	152	126-339	莊30経	209	126-468
桓07伝	103	126-233	莊10経	154	126-343	莊30伝	211	126-470
桓08経	104	126-236	莊10伝	155	126-345	莊31経	212	126-473
桓08伝	105	126-238	莊11経	157	126-351	莊31伝	212	126-474
桓09経	106	126-242	莊11伝	158	126-351	莊32経	213	126-475
桓09伝	107	126-242	莊12経	161	126-359	莊32伝	214	126-478

	排印本	稿本		排印本	稿本		排印本	稿本
閔01経	220	126-488	僖21伝	346	缺	文11経	539	127-377
閔01伝	220	126-488	僖22経	349	缺	文11伝	540	127-378
閔02経	225	126-499	僖22伝	349	缺	文12経	545	127-390
閔02伝	227	126-504	僖23経	356	127-001	文12伝	546	127-392
僖01経	243	126-536	僖23伝	356	127-001	文13経	552	127-404
僖01伝	244	126-539	僖24経	368	127-025	文13伝	554	127-406
僖02経	246	126-544	僖24伝	368	127-026	文14経	560	127-420
僖02伝	248	126-547	僖25経	388	127-069	文14伝	562	127-424
僖03経	250	126-554	僖25伝	389	127-071	文15経	567	127-432
僖03伝	251	126-555	僖26経	397	127-086	文15伝	568	127-433
僖04経	252	126-558	僖26伝	398	127-088	文16経	577	127-451
僖04伝	254	126-561	僖27経	401	127-096	文16伝	578	127-453
僖05経	265	126-590	僖27伝	402	127-097	文17経	585	127-465
僖05伝	266	126-592	僖28経	407	127-107	文17伝	586	127-466
僖06経	278	126-625	僖28伝	410	127-113	文18経	591	127-475
僖06伝	279	126-625	僖29経	436	127-166	文18伝	592	127-476
僖07経	281	126-631	僖29伝	437	127-167	宣01経	610	127-512
僖07伝	281	126-632	僖30経	438	127-171	宣01伝	612	127-516
僖08経	285	126-639	僖30伝	439	127-172	宣02経	614	127-521
僖08伝	286	126-644	僖31経	444	127-184	宣02伝	615	127-522
僖09経	288	126-648	僖31伝	446	127-189	宣03経	631	127-555
僖09伝	290	126-651	僖32経	449	127-194	宣03伝	631	127-556
僖10経	297	126-670	僖32伝	449	127-195	宣04経	639	127-571
僖10伝	298	126-671	僖33経	453	127-203	宣04伝	640	127-571
僖11経	302	126-681	僖33伝	455	127-206	宣05経	648	127-589
僖11伝	302	126-681	文01経	470	127-237	宣05伝	649	127-589
僖12経	304	126-686	文01伝	471	127-239	宣06経	650	127-595
僖12伝	304	126-686	文02経	478	127-254	宣06伝	651	127-595
僖13経	306	126-689	文02伝	480	127-257	宣07経	653	127-600
僖13伝	307	126-689	文03経	490	127-280	宣07伝	654	127-600
僖14経	309	126-692	文03伝	491	127-281	宣08経	655	127-603
僖14伝	309	126-694	文04経	494	127-289	宣08伝	658	127-610
僖15経	311	126-699	文04伝	495	127-291	宣09経	660	127-615
僖15伝	313	126-704	文05経	499	127-298	宣09伝	662	127-617
僖16経	330	126-743	文05伝	500	127-302	宣10経	664	127-623
僖16伝	331	缺	文06経	503	127-308	宣10伝	666	127-625
僖17経	334	缺	文06伝	505	127-311	宣11経	669	127-631
僖17伝	334	缺	文07経	516	127-331	宣11伝	671	127-634
僖18経	338	缺	文07伝	517	127-332	宣12経	677	127-645
僖18伝	338	缺	文08経	526	127-353	宣12伝	688	127-646
僖19経	340	缺	文08伝	527	127-354	宣13経	723	127-729
僖19伝	340	缺	文09経	530	127-359	宣13伝	723	127-729
僖20経	343	缺	文09伝	532	127-363	宣14経	724	127-732
僖20伝	344	缺	文10経	534	127-368	宣14伝	725	127-732
僖21経	345	缺	文10伝	535	127-369	宣15経	731	127-744

	排印本	稿本
宣15伝	734	127-751
宣16経	746	127-773
宣16伝	747	127-774
宣17経	750	127-783
宣17伝	751	127-785
宣18経	756	127-794
宣18伝	757	127-796
成01経	760	止
成01伝	761	
成02経	763	
成02伝	764	
成03経	806	
成03伝	808	
成04経	816	
成04伝	817	
成05経	820	
成05伝	822	
成06経	826	
成06伝	828	
成07経	836	
成07伝	837	
成08経	843	
成08伝	844	
成09経	852	
成09伝	854	
成10経	862	
成10伝	863	
成11経	869	
成11伝	869	
成12経	874	
成12伝	875	
成13経	881	
成13伝	882	
成14経	898	
成14伝	899	
成15経	903	
成15伝	905	
成16経	912	
成16伝	914	
成17経	947	
成17伝	950	
成18経	964	
成18伝	965	
襄01経	979	
襄01伝	980	

	排印本	稿本
襄02経	983	
襄02伝	984	
襄03経	989	
襄03伝	990	
襄04経	1000	
襄04伝	1001	
襄05経	1020	
襄05伝	1021	

附録二　提綱稿目次

僖01経	126-745
僖01伝	126-746
僖02経	126-747
僖02伝	126-748
僖03経	126-750
僖03伝	126-751
僖04経	126-752
僖04伝	126-753
僖05経	126-759
僖05伝	126-760
僖06経	126-768
僖06伝	126-769
僖07経	126-770
僖07伝	126-771
僖08経	126-775
僖08伝	126-776
僖09経	126-777
僖09伝	126-778
僖10経	126-784
僖10伝	126-784
僖11経	126-788
僖11伝	126-788
僖12経	126-789
僖12伝	126-790
僖13経	126-791
僖13伝	126-792
僖14経	126-794
僖14伝	126-794
僖15経	126-796
僖15伝	126-797
僖16経	126-810
僖16伝	126-811
僖17経	126-813
僖17伝	126-813
僖18経	126-816
僖18伝	126-816
僖19経	126-818
僖19伝	126-818
僖20経	126-821
僖20伝	126-821
僖21経	126-822
僖21伝	126-823
僖22経	126-825
僖22伝	126-825

讀劉文淇《春秋左氏傳舊注疏證》原稿本

野　間　文　史

清朝左傳學者劉文淇(1789-1854)的《春秋左氏傳舊注疏證》是一部未完成著作，該書于1959年經過中國科學院歷史研究所的整理工作後，以印刷版的形式首次被公開出版。并且2002年出版的《續修四庫全書》經部中也將該書的原稿以影印版的形式收録在内。

本論文是對印刷版和原稿進行比較結果的一个總結。

其目的在于，一，解明《春秋左氏傳舊注疏證》的形成過程；二，説明影印版的特點；三，明確歷史研究所的整理工作的実際情况。